

北杜夫の書齋遺品 — 旧制高等学校記念館への寄贈経緯 —

高 橋 徹（信州大学総合健康安全センター）

1. はじめに

2021年（令和3年）は、北杜夫（斎藤宗吉：1927年5月1日～2011年10月24日）の没後10年の節目であり、同年10月には旧制松本高等学校時代の日記である『憂行日記』⁴⁾が新潮社より出版された。一方、東京世田谷の北杜夫邸は改築されることになり、2021年2月に旧邸宅は解体された。その際、最後まで遺された多くの遺品は、北と縁の深い松本市の旧制高等学校記念館に寄贈されることとなった。

遺品寄贈の経緯は、岩波書店の雑誌「図書」2022年1月号に「北杜夫と躁うつ病と Z 旗」¹²⁾と題した短文にて発表した。本論では、その過程を写真もまじえてより詳しく報告する。松本市立博物館である旧制高等学校記念館に寄贈された北の遺品は、今後、研究資料や企画展資料として活用されることになると思う。いくつかの偶然が重なり、複数の関係者が連携することで実現した寄贈経緯は、「作家研究」や「博物館資料」といった観点からも興味深く、その過程を報告しておくことには意味があると考えた。記述方法は、まず「図書」¹²⁾に掲載した一文（後半の「Z 旗」に関する記述は本編では割愛し、別途、考察する）を引用した後、その前後のエピソードを詳述する形とした。（敬称は略させていただいた）。

2. 寄贈経緯

2-1. 論文作成

「昭和を代表する作家のひとりである北杜夫（本名斎藤宗吉）の逝去は2011年であり、2021年は没後10年となった。私は精神科医として信州大学に勤務し、2018年から2021年まで『作家・北杜夫と躁うつ病』と題する四編の論文を発表してきた。北は、父の斎藤茂吉と同じ精神科医であり、また専業作家となつてからは『躁うつ病』（双極性障害）に罹患し、その病状を数多くのエッセイで詳述した。」¹²⁾

「旧制松本高等学校（信州大学の前身）を舞台とした北杜夫著『どくとるマンボウ青春記』（1968年）は、同校卒業生である北の回想記である。北にとって信州は『第二の故郷』であり、そのつながりから信州大学附属図書館には、斎藤家からの寄贈蔵書からなる『北杜夫文庫』が2015年に創設されている。」¹²⁾

【解説】

筆者（高橋）は、北杜夫と40歳以上の年齢差があり、リアルタイムに北作品に接した世代では

ないが、青年期にもっとも愛読した作家が北杜夫であった。平成元年に信州大学医学部に入学し、卒業して精神科医になった。精神科症候学や精神療法などの分野で論文を発表してきたが、2011年からは病跡学の論文^{6,7)}も作成するようになった。「北杜夫を対象とした病跡学研究」というアイデアは漠然と持っていたが、具体的に動き出すきっかけとなったのは、2015年の信州大学附属図書館「北杜夫文庫」創設記念講演会であった。斎藤家から寄贈された北の遺品書籍（約600冊）からなる「北杜夫文庫」⁵⁾と記念講演会（長女・斎藤由香氏）に刺激を受け、日本学術振興会の科学研究費助成事業に研究申請をした。



図1. 「北杜夫文庫」創設記念講演会パンフレット

結果、2016～2018年度の挑戦的萌芽研究「作家・北杜夫の病跡学研究」が採択された。2018年に第一報論文「作家北杜夫と躁うつ病 ―双極性障害の診断―」⁸⁾が日本病跡学雑誌に掲載。この時期、本研究の存在をネットで知った竹内正氏（長野県在住の北杜夫研究家）^{14,15)}から連絡をいただき、竹内氏の自宅で情報交換。竹内氏が論文を発表してきた雑誌「信州大学附属図書館研究」の存在を知った。本雑誌の発行元である信州大学附属中央図書館に赴き、投稿希望の趣旨を伝えたところ、親族（斎藤家）の許諾を得ることを条件に、投稿可との返答を得た（その後、2019年～2021年に3編の論文を同誌に発表した）⁹⁻¹¹⁾。

2-2. 斎藤家訪問まで

「論文作成の過程で、斎藤家のご親族（喜美子夫人、長女の由香さん）とお会いする機会に恵まれた。はじめは論文発表の許諾を目的にお手紙をさしあげたが、そのご縁で2019年10月に東京、世田谷の斎藤家にお招きいただいた。」¹²⁾

【解説】

研究の趣旨をお伝えするための手紙を斎藤家にお送りした。すぐにメールと電話で、長女の斎藤由香さんと斎藤喜美子夫人からご返事があり、論文作成と発表の承諾をいただいた。また喜美子夫人は、北杜夫研究家の斎藤国夫氏（本名・青田吉正氏）を紹介してくださった。2018年12月、新宿で斎藤国夫氏とお会いした際、『北杜夫ノオト』²⁾をいただいた^{注1}。

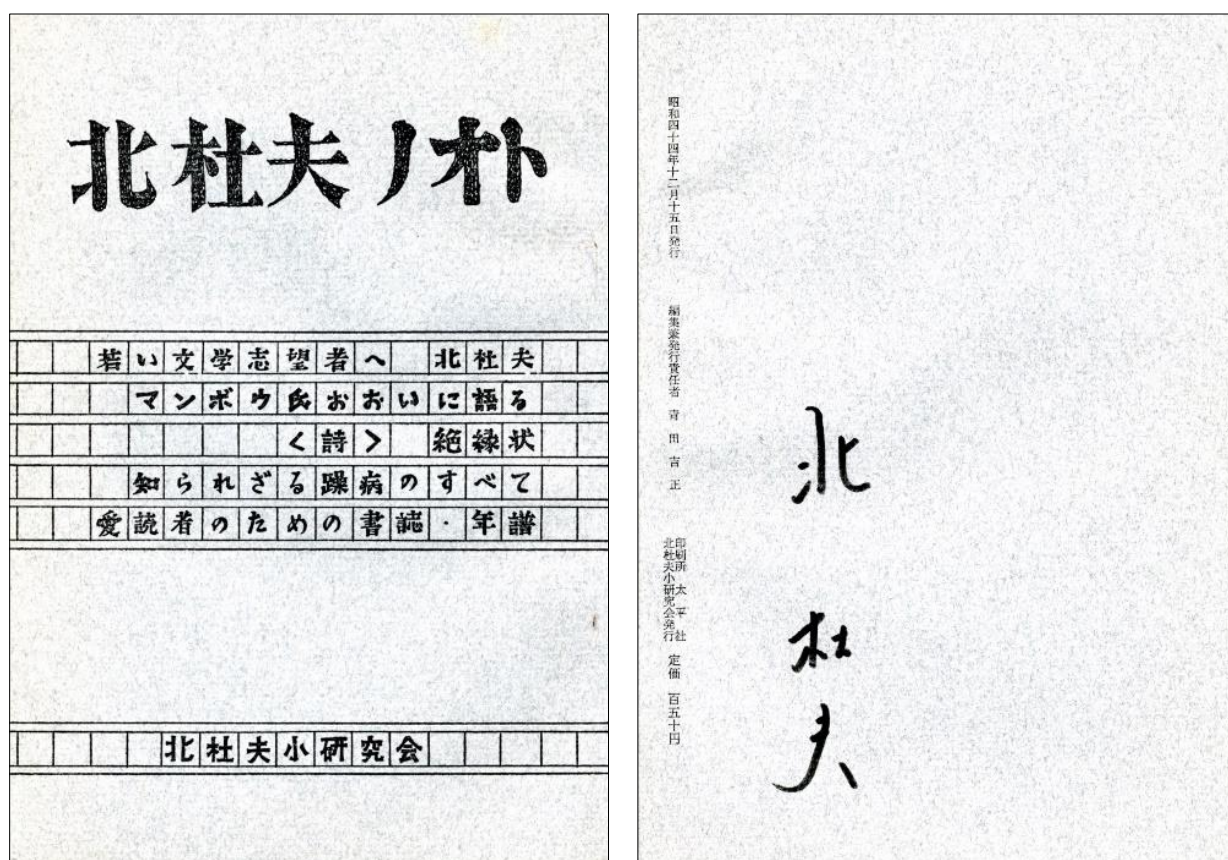


図2. 青田吉正編「北杜夫ノオト」昭和44年刊 表紙(左)背表紙(右)自筆サイン入り

翌2019年7月、信州大学自然科学館・附属図書館の主催で、松本市・旧制高等学校記念館にて、「斎藤茂吉と北杜夫の親子昆虫展」が開催された（信州大学理学部・東城幸治教授が主催）。新部公亮氏（日本昆虫協会理事。全国で「どくとるマンボウ昆虫展」を主催）の記念講演会を聴講。

そこで喜美子夫人とお会いし、世田谷の斎藤家にご訪問させていただく話となった。



図3.「斎藤茂吉と北杜夫の親子昆虫展」パンフレット

2-3. 斎藤家訪問

「2019年に北杜夫邸を訪問したとき、書斎や書庫に遺された書籍や資料などを奥様が整理されているところであった。私の頭のなかには、没後10年に向けて、書斎再現を中心とした企画展のアイデアがあった。」¹²⁾

【解説】

2019年10月27日、世田谷の斎藤家（北杜夫邸）を訪問。斎藤国夫氏と栗原正哉氏にも同席いただいた。（栗原氏は元新潮社の編集者。北杜夫を35年担当。元担当編集者のお話もお聞きしたい旨をお伝えしたところ、喜美子夫人が調整して下さった）。北をもっとも身近で接した方々から、様々な逸話をお聞きすることができた。

応接間の本棚には、三島由紀夫や遠藤周作などからの献呈本や漫画本のコレクションが遺されており、2階の書斎もそのままの状態で保管されていた。また母屋とは別に建てられた書庫にも多くの資料が遺されていた。



図4. 2019年10月27日 北杜夫邸1961年築(2021年2月解体)



図5. 書斎机・椅子・作り付け引出し(右)



図6. 書斎机・椅子・作り付け本棚(右)



図 7. 書斎 斎藤喜美子夫人(右)栗原正哉氏(左)



図 8. 書斎入口からの写真 右端に椅子 左奥が机と逆側の本棚
栗原正哉氏(右) 斎藤喜美子夫人(中央) 斎藤国夫氏(左・背中)
左奥にある押入れの資料をみているところ。



図9. 書庫 栗原正哉氏(右) 斎藤喜美子夫人(中央) 斎藤国夫氏(左)
多くの書籍や資料が遺されていた。

2-4. 斎藤家訪問後・寄贈受入れまで

「松本に戻って旧制高等学校記念館（1981年に開設された旧制松本高等学校記念館を前身として、全国にあった旧制高等学校の資料を集めて展示している）に、斎藤家からの遺品寄贈の受け入れについて打診したところ、前向きな返答があった。そのため2020年3月に、同館学芸員と北杜夫邸を再訪する予定としたのだが、コロナ禍で中止に。同年9月、奥様にご連絡したところ、ご自宅（1961年築）の解体を、翌2021年2月に予定しているとのことであった。一方、旧制高等学校記念館では、寄贈受け入れに際して審査会を通す必要があったが、コロナ禍にて長野と東京の往来は難しかった。事は急を要する。ご家族と相談し、遺品を信州大学の空きスペースにひとまず移送する計画をたてた。2020年12月から2021年1月にかけて、引越し業者や宅配業者を利用し、遺品一式を移動。さらに2021年3月に、信州大学において旧制高等学校記念館の仮審査を受け承認。書斎机等一式と段ボール箱約24個からなる全資料が記念館に寄贈された。」¹²⁾

【解説】

遺品寄贈の受入れに関して、旧制高等学校記念館と情報共有し、2020年3月8日に学芸員の石原氏と北杜夫邸に伺う予定としたが、コロナ感染の急拡大にともない直前に中止とした。その後、旧制高等学校記念館学芸員の高山峻一氏を窓口として、松本市博物館と調整。寄贈受入れの方向性は共有できたものの、実地検分なしでは判断できないこともわかり、一旦、筆者が所属する信州大学総合健康安全センターの空きスペースに遺品を移送することにした。2021年3月12日、木下守氏（松本市教育委員会・松本市立博物館館長）の実地検分を実施。仮審査で承認となり、遺品を記念館に移送。さらに同年8月、本審査を経て正式承認され、北杜夫の全遺品が旧制高等学校記念館（松本市立博物館分館）に寄贈された。



図10. 信州大学総合健康安全センターに移送した遺品の
一部(机・椅子等)



図11. 移送した書籍・資料などが入った段ボールの一部



図12. 『月と10セント』に関連したアポロ計画取材時の資料
1969年当時のNASA公式資料と英字雑誌

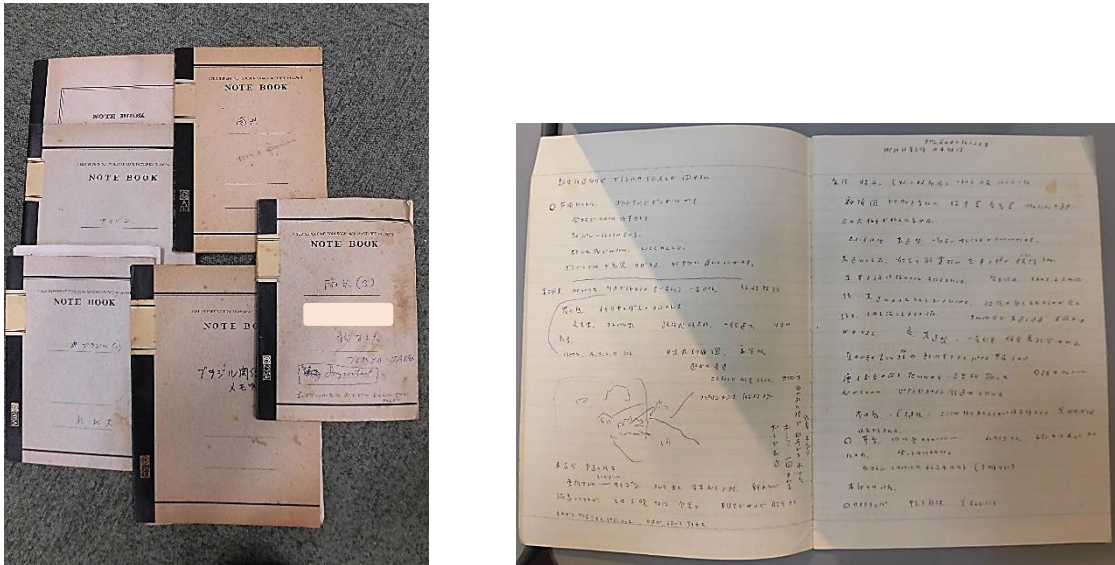


図 13. 『輝ける碧き空の下で』創作・取材ノオト



図 14. 寄贈遺品を信州大学から旧制高等学校記念館に移送する学芸員の高山氏(左)

3. 後日談

正式に遺品寄贈が承認された2021年8月は、前年にコロナ禍で延期された東京オリンピックが開催されたが、コロナ第5波（デルタ株）による緊急事態宣言が発出された時期でもあった。（筆者が所属する総合健康安全センターでは、学生と教職員を対象に、職域ワクチン接種が7月～10月に連日実施された）。一方、2021年は北杜夫没後10年でもあった。これにあわせて、斎藤国夫編・北杜夫著『憂行日記』⁴⁾が2021年10月に新潮社より発刊された（巻末資料1）。旧制松本高

等学校時代の日記を斎藤国夫氏が翻刻したものであり、詳細な注釈と解説が巻末に付されている。旧制松本高等学校時代を著した『どくとるマンボウ青春記』をより深く理解するための貴重な資料といえる。昆虫学者を志した北杜夫（斎藤宗吉）が、父・斎藤茂吉の厳命によって東北大学医学部を受験することになる経緯は『どくとるマンボウ青春記』に詳しいが、『憂行日記』の虫に関する記述の多さからも、北の昆虫学志望が本物であったことを伺い知ることができる。北の自然科学の素養は、理系の視点（客観的な観察者の視点）をもつ作家としての立脚点となり、これは当時の日本文壇では稀有な資質であったと考えられる。

コロナ第5波が収束するなか、旧制高等学校記念館は企画展の準備を進め、翌2022年1月23日～2月20日に、「第10期市民学芸員養成講座成果発表企画展」として北杜夫の遺品展示が開催された（巻末資料2-3）。それとは別の話として、筆者の論文指導者である松下正明氏（東京大学名誉教授）が^{6,11)}、筆者を岩波書店編集者の猿山直美氏に推挙して下さり、それが本論で引用した「北杜夫と躁うつ病と Z 旗」（雑誌「図書」2022年1月号）¹²⁾の掲載につながった。振り返ってみれば、偶然の積み重ねと人の縁、そこからの連鎖反応に背中を押される形で事が進んでいったように思われる。コロナ禍はときに障壁となり、一方で思い切った決断をうながす要因となったかもしれない。

4. 結語

松本市旧制高等学校記念館の企画展において、北杜夫の書斎が再現された（巻末資料4）。これに関連して、1997年発刊の『マンボウ酔族館 パートV』に掲載されたエッセイ「机と椅子」を以下に引用する³⁾。（下線は筆者による）。

「私は中年になってから、ソウウツの気配が出てきた。ウツになると無気力になり、二階の書斎にあがっていく元気もなくなる。仕事もほとんど引き受けず、わずかの仕事も階下の四畳半の炬燵の上、食堂の机、或いは寝室のベッドの上です。従ってウツの二年間くらいは、二階の机を使うことはまったくない。そのため、私の古机は未だこわれもせず、まだその外観をとどめているのである。それにもう何年か私はソウになっていないので、二階の書斎は『あかすの間』となった。机の上にも埃がつもって、とうとう妻が布をかぶせてしまった。かくて私の古机は、私の死んだあとも残っていることであろう。」³⁾

晩年はあまり使われることのなかった書斎の古机かもしれないが、作家の象徴であることにかわりはない。北杜夫は、間違いなく昭和を代表するベストセラー作家であり、縁の深い松本の地において書斎再現を実現できたことは、松本市民として嬉しい限りである。松本市立博物館分館・旧制高等学校記念館が、北杜夫を語り継ぐための拠点となることを期待している¹³⁾。

謝辞

本論作成にあたり、ご高閲とご承認を賜りました青田吉正先生、栗原正哉様、高山峻一様、斎藤由香様、斎藤喜美子様に深く感謝申し上げます。またご指導、ご協力いただきました松下正明

先生、森田洋先生、竹内正先生、東城幸治先生、猿山直美様、渡邊麻友様、鎌倉希様、木下守様に深謝申し上げます。本論に関連して開示すべき利益相反はない。

注1：「北杜夫ノオト」²⁾は、青田吉正（ペンネーム・斎藤国夫）が、早稲田大学在学中の1969年（昭和44年）に出版した小冊子。北のインタビューや年譜などが掲載されており、その内容の多くは「北杜夫の世界」¹⁾に再録された。一方で、商業誌には未発表の内容もあり、本冊子で北は、当時の服薬内容として、「クロルプロマジン」を「50ミリくらい使ってる」と語っている。また友人の医者から「混合精神病」に似ている、と言われたとも述べている。

北杜夫による本冊子巻頭言「このパンフレットの成立に一言」の一部が以下。

「何年か前、一青年から手紙がきて、そのあと私は彼と会った。私は読者とは面会しない主義である。それを破ったのは、彼が、私のずっと昔に詩を投稿した雑誌などをずいぶんと揃えていることを知ったからである。その中には、私自身が失なって手元になく、そういうことすら忘れていた雑誌もあった。青年は、その二冊ほどの雑誌を、無造作に私にくれると言った。『これは貰っていいのか、君はぼくのものの蒐集家らしいが、君はどうするのか』と尋ねると、彼は、『かまいません。ぼくはまた探します』。と、ひとこと言って、そのまますぐ帰っていった。私は内心感服もし、感動もし、同時に、妙な野郎だ、とも思った。そのまま彼は私のまえから消え去り、そうしてまた何年か経った。ふいに、一通の手紙がきた。昔のことが述べられているので、私はその青年から雑誌を貰ったことを思い出すことができた。内容は、某大学の文学部の雑誌（それは学内紛争のため最後の一号になるという）に、あなたのことを特集したいので、インタビューできないか、ということであった。（中略）その後、前記の青年から連絡があり、大学の雑誌はついに出不いことになった、自分としては個人、または少数のグループでパンフレットなりを作りたい、と言ってきた。」

文献

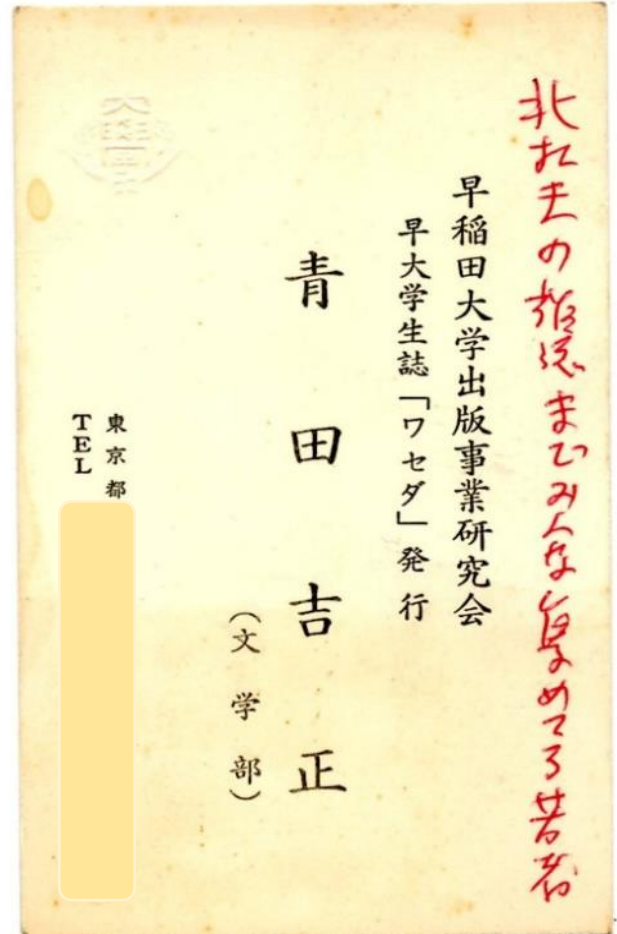
- 1) 別冊新評 北杜夫の世界. 新評社, 東京, 1975.
- 2) 北杜夫：北杜夫ノオト. 青田吉正編・北杜夫小研究会発行, 東京, 1969.
- 3) 北杜夫：マンボウ酔族館 パートV. 実業之日本社, 1997.
- 4) 北杜夫著、斎藤国夫編：憂行日記. 新潮社, 2021.
- 5) 村田輝：「北杜夫文庫」紹介. 信州大学附属図書館研究, 5：171-181, 2016.
- 6) 高橋徹、松下正明：宮崎駿にみる身体感覚 ― 身体感体験と創造性 ―. 病跡学雑誌82：75-86, 2011.
- 7) 高橋徹、松下正明：作家「伊藤計劃」― 病と創作 ―. 病跡学雑誌89：65-80, 2015.
- 8) 高橋徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 ― 双極性障害の診断 ―. 病跡学雑誌, 95：58-74, 2018.

- 9) 高橋徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 ―顕在発症前エピソードと『どくとるマンボウ航海記』. 信州大学附属図書館研究, 8 : 57-87, 2019.
- 10) 高橋徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 ―初期作品の系譜―. 信州大学附属図書館研究, 9 : 145-173, 2020.
- 11) 高橋徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 ―北杜夫をめぐる人びと―. 信州大学附属図書館研究, 10 : 99-130, 2021.
- 12) 高橋徹：北杜夫と躁うつ病と Z 旗. 岩波書店「図書」2022年1月号 p30-33, 2022.
- 13) 高橋徹：北杜夫の書斎遺品の紹介と活用について. 旧制高等学校記念館「記念館だより」第86号（令和4年3月31日発行）p4-7, 2022.
- 14) 竹内正：松本時代の北杜夫 其の一：『寂光』に映された父茂吉の陰影. 信州大学附属図書館研究. 6 : 33-77, 2017.
- 15) 竹内正：松本時代の北杜夫 其の二：初期詩篇等の諸相. 信州大学附属図書館研究. 7 : 119-170, 2018.

巻末資料 1.



斎藤国夫編・北杜夫著『憂行日記』新潮社、2021年



北の書斎にあった斎藤国夫(青田吉正)の名刺
旧制高等学校記念館所蔵

「北杜夫の雑誌までみんな集めてる若者」は北のメモ

旧制松本高時代の 日記を編者が解説

旧制松本高時代の北さんについて語る斎藤さん



「北杜夫さん 虫と文学に情熱」

松本市の信州大付属中央図書館は5日、旧制松本高校出身の作家北杜夫さん（192

7〜2011年）が在学中の日々をつづった『憂行日記』（新潮社）を解説する講演会

を開いた。編者の斎藤国夫（本名・青田吉正）さん（75）は東京IIの話を、オンラインを含め約40人が聞いた。

日記は入学直前の1945年6月から47年12月まで6冊のノートに残る。終戦を迎えた45年の大みそかの記述は、東京の実家が空襲で焼けたことなどを振り返りつつ、「二に昆虫、二に読書。かならずやシジミチョウと蟻との関係を明らかにしてみせる」と記し、学生生活に意欲を燃やす様子が読み取れる。

「2年生になった46年から、詩や戯曲への創作熱が高まった」と斎藤さん。同年12月には「虫と文学との融和。これが自分にとっての最大の希望」とも記しており、斎藤さんは「『どくどくマンボウ昆虫記』などの作品につながる北さんの心情の動きが伝わるのが日記の魅力」と語った。

講演会は、日記や作品に登場する昆虫標本を紹介する同館の企画展（25日まで）に合わせて企画した。

2022年10月5日開催『憂行日記』編者・斎藤国夫氏講演会

信濃毎日新聞 2022年10月7日（許可 No. 2206202）

巻末資料 2. 2022年1月20日～2月20日開催・企画展パンフレット

The poster features a central image of various personal items belonging to Kitamura Tokuo, including a black Canon camera, a yellow Tiger Beer bottle, a stack of books, a small portrait of him, and several Japanese banknotes. In the background, a faded portrait of Kitamura Tokuo is visible. The text is arranged around these items, providing details about the exhibition.

第10期市民学芸員養成講座成果発表企画展

― 多彩で多才 ―

面白い北杜夫さん

入場無料

2022
1/23
2/20

旧制高等学校記念館
1階ギャラリー
9時から17時（入館16時半まで）

講演会：「北杜夫の書斎遺品の紹介と活用について」※要予約・先着順
講師：高橋徹氏（信州大学総合健康安全センター）
会場：1月29日（土）13時30分～15時30分 あがたの森文化会館講堂 第一会議室
申込：旧制高等学校記念館（TEL0263-35-6226）

2021年は北杜夫の没後10年にあたり、旧制松本高等学校時代の『憂行日記』が刊行された。また同年に北杜夫邸は解体され、書斎遺品が斎藤家より旧制高等学校記念館に寄贈されている。この寄贈された遺品の概要を紹介し、その展示のもつ意味を考えてみたい。



没後10年を経て、**北杜夫**が青春を過ごし、作家としての根幹を養った地である松本に遺族から遺品の数々が寄贈されました。その中の貴重なものを今回**初公開**します。旧制松本高等学校時代の**奇行・蜜行**を偲ぶことのできる品々や、**マンボウマブゼ共和国**建国など、作家となった後の文学の世界を超越した不思議な活動が分かる資料を紹介し、北杜夫が多くの方面でその多彩な能力をいかに発揮したかをお示しします。**芥川賞作家**というような真面目な側面だけでなく、簡単に捉えることができないほど多彩で多才な、とてつもなく面白い人物が、この松本で生活し成長したことを実感してください。

会期中にマンボウ愛に溢れる**講演会**(表面参照)や北杜夫の文学の一端に触れる**クイズ**も用意しました。(記念品あり) ※記念品は数に限りがあります。



マンボウマブゼ共和国オリジナルデザインのマイルドセブン



マンボウマブゼ共和国 紙幣



北杜夫愛用のカメラ



旧制高等学校記念館

〒390-0812 長野県松本市東3-1-1
TEL 0263-35-6226 FAX 0263-33-9986
URL <http://www.matsu-haku.com/koutougakkou/>
E-mail: kyusei-koko@city.matsumoto.lg.jp

巻末資料3. 企画展新聞記事


新 報

第三種郵便物認可

寄贈された北杜夫さんの遺品の一部。ファンだった阪神のメガホンもある。写真は旧制高等学校記念館提供。

北杜夫さん遺品 縁ある松本に

遺族、旧制高等学校記念館に2000点寄贈



旧制松本高校（松本市出身で、ごくくるとマンボウシリーズで知られる作家の北杜夫さん（1927～2011年）の遺品約2千点が、松本市の旧制高等学校記念館に寄贈された。没後10年に当たる昨年、東京都世田谷区の自宅が解体され、北さんの妻・斎藤喜美子さん（84）、長女の由香さん（59）が信州大を通じて同館に寄贈を申し出た。同館は23日から開く企画展で寄贈品の一部を公開。22年度には、北さんの書斎を復元した常設展示を館内に設けることになっている。

23日からの企画展で一部展示

「心のふるさとで公開 喜ぶ」

寄贈品は、亡くなる直前の状態で保管されていた書斎の机や書架、灰皿などの他、北さんが旧制松高時代に書いた筆書き、校内雑誌に寄せた原稿など。北さんの山岳小説「白きたおやかな峰」の題材となり、パキスタンのカラコルム山脈にある7千峰デイルンへの遠征隊に医師として参加した際のシラフ（寝袋）といった、作品にまつわる品々も数多い。

精神科医であり、自らそううつ病（双極性障害）であることを公表していた北さん。今回の寄贈品には、自宅を日本から独立させようと、1981年に「マンボウ・マブゼ共和国」建国宣言をした際に、各国首脳に送った宣言書、紙幣やたばこといったユニークな品もある。

北さんの創作活動を精神病理学的な分析手法で研究してきた医師で、信州大総合健康安全センターの高橋徹准教授は「病状が時に創作に向かうエネルギーになったことをうかがわせる遺品も多い。北さんの人間性や、作品の基盤となった自然科学的な視点を読み解く研究上の価値は非常に高い」と語る。

妻の喜美子さんは「山と昆虫が大好きで旧制松高に進み、松本が主人の人格や文学的な素地を育んだ。心のふるさとでの遺品の公開は、主人が一番喜ぶことだと思います」と話している。

寄贈品にはマンボウ・マブゼ共和国の「紙幣」も



(第3種郵便物認可)

市民タイムス

北杜夫さん 遺品でしのぶ

旧制高校 記念館 寄贈品あすからお披露目



展示準備をする受講生ら



公開される遺品の一部

松本市県3の旧制高等学校記念館に旧制松本高等学校出身の作家・北杜夫さん（1927～2011）の遺品が寄贈され、23日から一部がお披露目される。書籍を中心とする約2000点の遺品の中から愛用品やユニークな人柄をうかがわせる品々を展示し、没後10年を経た北さんの多才ぶりを紹介する。

東京都世田谷区の自宅が昨年解体され、そううつ病を公表していた北さんを研究対象とする信州大学総合健康安全センターの精神科医・高橋徹准教授を介して

遺族が寄贈した。展示内容は市民学芸員養成講座の本年度受講生が「多彩で多才く面白い北杜夫さん」のタイトルで企画し、21日から2日間の日程で会場準備をしている。

五つのコーナーに分け、ケース内の25点に加え一角に置く書斎机などに展示する。旧制松高時代に始まった「我ハ天才ナリ」と始

まる書、カメラや灰皿といった愛用品、海外で収集したスプーンなどが並ぶ。北さんが独立を宣言したという「マンボウ・マブゼ共和国」の紙幣やたばこ、ファンだったプロ野球・阪神タイガースのグッズなどもある。展示は2月20日まで。

受講生らは「知らなかった一面や、家族の支えがあったことが伝われば」と話している。記念館の学芸員・高山峻一さんは「旧制高等学校の顔ともいえる存在。松高時代の品も多

くありがたい」といい、新年度は常設展に北さんの書斎の再現を加える計画だという。

（鎌倉 希）

巻末資料 4. 市民タイムス掲載記事 2022年2月16日～3月11日

2
令和4年(2022年)2月16日 水曜日 (20)

旧制松本高等学校出身で、「どくとるマンボウ」シリーズなどで知られる作家の北杜夫さん(1927～2011)の遺品約2000点が旧制高等学校記念館(松本市県3)に寄贈され、20日までお披露目の企画展が開かれている。愛用品や蔵書など、幅広い趣味や才能あふれる人柄が表れた品々の一部を多彩なエピソードとともに紹介する。



文筆活動支えた相棒

① 机と椅子

古色蒼然とした重厚感あるたたずまいや、左右に付いた引き出しの便利さを気に入っていたという。「机と椅子」と題したエッセーが残ることからも愛着の深さがうかがえる。椅子は実家で使われていた籐製のものから途中で買い換えた。

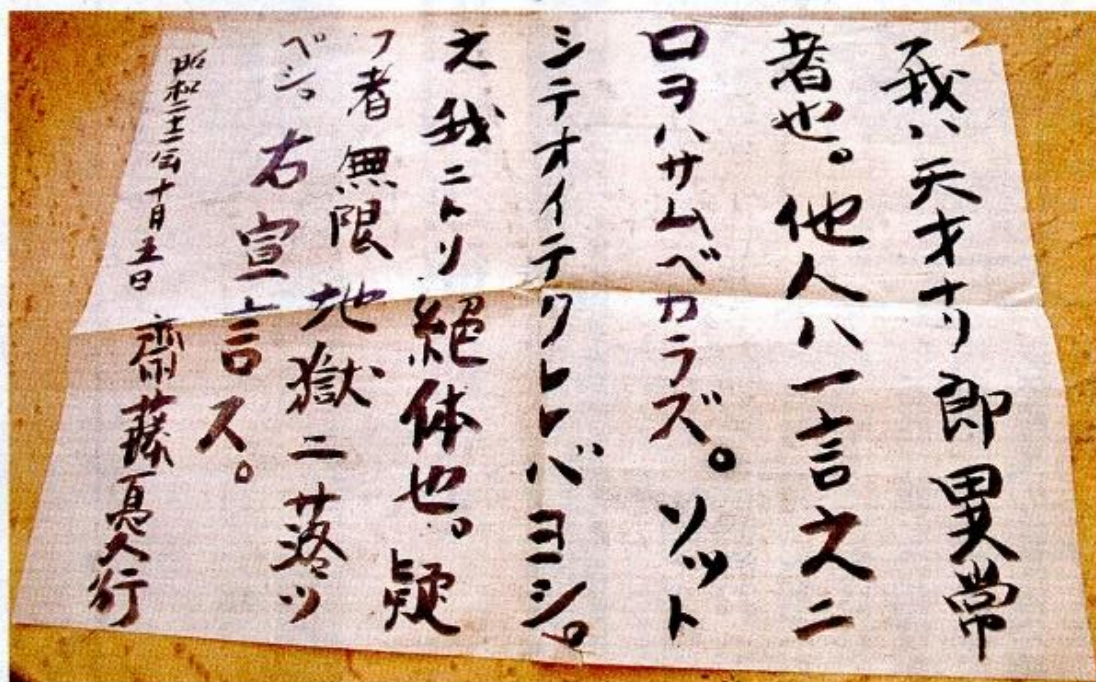
【随時掲載】

まだ独身で兄の家に居候していた頃、物書きにふさわしい代物を探して古道具屋で求めた大型の書斎机。長編小説『楡家の人びと』をはじめ北さんの文筆活動に最初から最後まで「お供」した相棒だ。

多
彩
で
多
才

北杜夫さん遺品より

令和4年(2022年)2月17日 木曜日 (20)



動物学への夢絶たれて

② 書「我ハ天才ナリ」

多彩多才

北杜夫さん遺品より

昭和22(1947)年、松本高等学校に在学していた北さんは生涯1

度の主張を通そうと、大学で動物学を学びたい旨を手紙で父・齋藤茂吉に伝えた。しかし、その返事は「貧乏学問だからやめなさい」というものだった。

この書は、その翌日にしたためられた。「我ハ天才ナリ即異常者也」と始まり、「ソットシテオイテクレレバヨシ」「疑フ者無限地獄ニ落ツベシ」と落胆や悔しさもにじむ。「齋藤憂行」は松高時代に名乗ったペンネームだ。【随時掲載】

令和4年(2022年)2月18日 金曜日 (28)



“独立”宣言 紙幣も発行

③ マンボウ・マブゼ共和国グッズ

北杜夫さん遺品より
50代の頃、自宅を「マンボウ・マブゼ共和国」と称して日本からの独立を宣言した。精神科医でもある本人が公表していたそう。病のその時期に当たり、各国首脳宛てに手紙まで出したという。紙幣や硬貨、国旗、国歌などにも作った同国のたばこには「北杜夫曰く健康の為、もつとタバコを愉しく喫いましょう」の注意書きも。紙幣のイラストは画家の谷内六郎(1921-81)が手掛ける豪華さだった。

【随時掲載】

令和4年(2022年)2月22日 火曜日 (20)



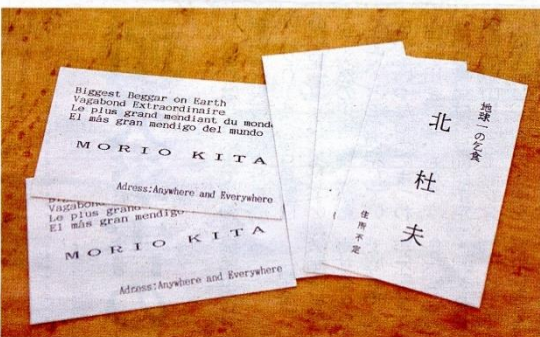
海外渡航時に愛用

④ カメラ

北杜夫さん遺品より
『いくとるマンボウ航海記』に記されている、水産庁の漁業調査船に船医として乗り込み世界を航海した昭和30年代前半は、まだ日本人が自由に海外渡航できる時代ではなかった。北さんはカメラを携え、珍しい外国の様子を収めたという。その後も何度となく海外へ足を運び、仕事ならカメラマンが同行するものの私的な旅では自らシャッターを切った。カメラは何台か買い換えながら愛用し、ネガフィルムもかなりの量が保管されていた。

【随時掲載】

令和4年(2022年)2月23日 水曜日 (20)



渡米時の壮大な“企み”

⑤ 乞食名刺

北杜夫さん遺品より
昭和44(1969)年、初の月着陸を目指したアポロ11号打ち上げの取材でアメリカを訪問した。出発前からその状態となっていた北さんは、かぐや姫の子孫と称して金を稼ぐ「月乞食」を思いつく。和服や矢立、短冊、英文パンフレットなどをそろえて実行するも思惑通りにはいかなかった。このエピソードが著書に紹介されている。「地球」の「乞食」と書かれた名刺もこのときに作ったもの。裏面には、英語やフランス語などの表記がある。

【随時掲載】

令和4年(2022年)3月1日 火曜日 (20)



験担ぎにこだわり応援

⑥ タイガースのメガホン

北杜夫さん遺品より
北さんは熱狂的な阪神ファンとして有名だった。新聞社の企画でネット裏観戦することもあったが、自宅でのテレビ観戦が主流だった。ホームランなどの大事な場面が寝転がって足を組んでいたときなら次も同じ体勢、たばこを吸っていたときならその次も、と験担ぎにこだわっていた。

【随時掲載】

補足：左下の「乞食名刺」は、新潮社の栗原正哉氏が北杜夫からの依頼で、昭和60年代以降に作成したもの。栗原氏の指摘で判明したため、ここに補足して修正する。

令和4年(2022年)3月2日 水曜日 (20)



⑦ スーベニアスプーン

異国の空気感じる意匠

多彩で多才
北杜夫さん遺品より

取材も含めて頻りに海外へ出掛けた北さん。個性豊かな土産品のスーベニアスプーンを収集していた。国や都市の名称が刻まれている。紋章があらわれたりさまざまな意匠が楽しい。母の土産や海外滞在歴のある妻が持っていたものもあるという。旅行先は、敬愛するドイツの小説家トーマス・マンにちなみヨーロッパが多かったが、骨折を経験した晩年は、長時間飛行を避けて東南アジアや友人がいた香港などを訪ねた。

【随時掲載】

令和4年(2022年)3月8日 火曜日 (20)



カラコルム登頂に挑む

⑧ 登山服と寝袋

山と昆虫が好きで入学した旧制松本高等学校時代は、信州の山を軒並み登ったという。昭和40(1965)年、松高の先輩・小谷隆一さんから声が掛かり、京都府山岳連盟の西部カラコルム・登山隊に医師として参加。登山には失敗したもの、このときの体験を基に長編小説『白きたおやかな峰』が書かれた。登山服と寝袋は装備の一部で、登山服はかのテレビ番組「徹子の部屋」に出演した際も着用したという。

【随時掲載】

多彩で多才
北杜夫さん遺品より

北杜夫さん遺品より

令和4年(2022年)3月9日 水曜日 (24)



乗馬用のヘルメットと馬に使ったわち。若い頃、気に入っていた軽井沢で妹が乗馬

執筆の合間の楽しみ

⑨ 乗馬用品

多彩で多才
北杜夫さん遺品より

乗馬用のヘルメットと馬に使ったわち。若い頃、気に入っていた軽井沢で妹が乗馬をしたと聞いて北さんも始めたという。もっぱら開放的な林間を走る外乗を好んだ。妻・喜美子さん(84)によると、結婚後最初の夏に軽井沢に滞在した際、北さんの執筆の合間に一緒に馬に乗り、東京でもそろって乗馬クラブに所属した。「馬はすっくと好きだった」といい、信州の山とともに絵にも描いていたという。

【随時掲載】

令和4年(2022年)3月11日 金曜日 (28)



素人芝居で笑い振りまく

⑩ 劇団「樹座」の台本

北さんは多くの作家と交流があった。共に軽井沢に別荘を構えていた遠藤周作さん(1923-1996)は親交が深かった一人で、遠藤さんが素人を集めて主宰した劇団「樹座」にも参加していた。せりふは下手なほうで面白くないというやう人天国、見る人地獄の舞台。主役を複数人で演じるユニークな設定で、北さんも主演に名を連ねたり小説家の佐藤愛子さんと共演したり、客席に笑いを振りまき楽しく花を添えたという。終わり

【この企画は鎌倉希が担当しました】

多彩で多才
北杜夫さん遺品より

北杜夫さん遺品より